

V 二人の聖賢

1 小野寺鳳谷

鎌田三之助の祖父玄光は、小野寺鳳谷からしばしば師事を受けたという。その鳳谷は、江戸末期に仙台藩が我が国最初の西洋式軍艦「開成丸」を、三浦乾也を江戸から招き、塩竈の浦戸諸島“寒風沢島”で建造する際に監督を務めていた。

(開成丸造艦については、『貞山運河事典』をご覧ください。http://teizanunga.com/urato.aspx)

品井沼干拓と造艦という大事業の要には、やはり素晴らしい人物がいた。

ここに紹介する小野寺鳳谷の碑は、鳳谷翁の名声の不朽を計るため、鎌田三之助が主唱し、建立したものである。

なお、篆額は内閣総理大臣伊藤博文による。

所在地：宮城県大崎市鹿島台木間塚字竹谷

<解説板の内容>



小野寺鳳谷 ※原文のまま掲載

諱は篤謙、字は君鳴、謙治（注1）と称す。鳳谷は号である。幼時から学問を好んで能くこれを修めたので、村民はその才能に驚嘆して神児と言った。

家は、代々松山邑主茂庭氏の家臣であったので、その祖先が邑主の領地木間塚村竹谷を開墾してここに住んでいた。

君鳴となって、その才識の尋常でない事が大主公から認められて宗藩士の中に加えられ、養賢堂の教官に挙げられて学頭添役となった。傍ら鑄砲、造艦の監督を仰付られてこの事に当たった。

蓋し、彼は単に学識が秀でていたばかりでなく、我が国における洋形造艦の一方の権威者であった。

人となり慷慨、大節あって早く心を海防、経世、殖産、興業に留め、殊に海防の急を悟って海内を周遊し、山海に陋塞嶮夷を詳かにして、多くの英俊と交り、事の急を告げ、国事を談じ、郷にあっては石巻港に学校を開いて生徒に教えたこともあった。

その後、藩命を受けて蝦夷地を歴遊する等、常に国家の為尽力するところが多かった。

更に彼は著述に筆を染め、著書は数十種の多きに上っている。そこで世の人々が君鳴の人物を讃えて、林子平、大槻平泉の後に指を屈した程である。

慶応二年四月十三日五十七歳 経緯の策ようやく熟せる秋不幸病を得て歿した。仙台定禅寺に葬る。

郷人その人物を惜み、追慕甚しく、鎌田三之助主唱して翁が名声の不朽を計り、碑を木間塚公会堂に建てた。

平成三年十月

鹿島台町教育委員会

こちらでは、碑と碑文の全体を紹介します。



小野寺鳳谷翁碑銘 内閣總理大臣從二位勲一等伯爵伊藤博文篆額

仙臺有松嶋金華山之勝鳴天下其山海清淑之氣擬成偉人先有林子平建海防東大
 槻平泉創養賢堂擴張文武其子習齋紹述之鑄砲造艦鍊習西洋陣法擢鳳谷翁為養
 賢堂教官旁督鑄造事翁薦太田長五郎鑄大砲告藩俟聘三浦乾也於江戶造軍艦號
 開成丸蓋本邦造洋形軍艦之權輿云翁為人慷慨有大節幼好學鄉里稱奇童長善詩
 及畫殊注意於航海經世開產興業周遊海內詳山海阨塞嶮夷多交英俊談國事歸鄉
 下帷石卷港教生徒有年後奉藩命歷遊蝦夷其所著數十種曰海防策東藩野乘茂庭
 傳記西遊記西遊日録西遊餘話西遊吟稿礦山小誌北遊日箋蝦夷附録仙藩孝義録
 仙藩復讐傳松島竹枝百首石卷雜詠石卷全圖蝦夷海陸路程全圖東海路程全圖松
 嶋全圖陸奧全圖耶馬溪圖卷蝦夷島奇觀千賀浦御船記紀阿美津斃蟒蛇事嗚呼如
 翁可謂稟山海清淑之氣繼林大槻諸賢而興者矣頃翁子常治來曰鄉人不諉先考將
 建睥於木間塚村竹谷小鬻側以圖不朽先生曾誠先考請銘之因叙其梗●曰翁諱篤
 謙字若鳴稱謙治小野寺氏鳳谷其●父稱喜左衛門號喜樂翁母佐藤氏仙臺藩主伊
 達氏族松山邑主茂庭氏世臣其祖墾開竹谷氏孫世居焉至翁擢為宗藩士養千葉氏
 子篤之嗣舊里家翁慶應二年四月十三日病歿年五十七葬仙臺定禪寺配後藤氏生
 一男一女男即常治承後女歸青木平左衛門銘曰

書無益人 奚足為文 事無益國 奚足為勲

巨砲大鑑 擴張三軍 治可守● 戰可破堅

關幽頭晦 著書等身 書所不盡 畫以寫真

松嶋之海 金華之山 翁之名績 永世俱傳

明治二十七年九月

女子高等師範学校教授正六位南摩綱紀撰 仙臺 大越英春書

(注) ●は号の右に帛

<参考>

この碑文の内容を、鹿島台町史（p909）では次のように紹介している。町史からそのまま転載しておく。

小野寺鳳谷の碑

出典：鹿島台町史

小野寺鳳谷は、幕末における大学者であり、洋形造艦の権威者であり、鹿島台が生んだ大偉人である。当時林子平、大槻平泉と並び称された大人物であった。

明治に至り郷土の人々はその人物を惜しみ、追慕の念もだしがたく、鎌田三之助が主唱して明治二十七年九月碑を当時の木間塚小学校敷地内に建てた。

篆額は、時の内閣総理大臣従二位勲一等伯爵伊藤博文である。鎌田三之助はときに三一歳、県会議会に初当選した年であるが、政友会に属していたので、政友会総裁でもある伊藤首相に依頼したものであろう。

撰文は女子高等師範学校教授正六位南摩綱紀であり、書は仙台の大越英春である。

碑文は漢文で記されているが、原文に読みをつけて次に掲げる。

小野寺鳳谷翁碑銘

従二位勲一等伯爵 伊藤博文篆額

仙台に松島、金華山の勝有り、天下に鳴る。其の山海は清淑の気凝成せり。偉人は先に林子平有り、海防に策を建て、大槻平泉は養賢堂を創して文武を拡張せり。其の子習齋これを紹述しやうじゆつ（前人の後を受け継いで述べ行くこと）す。砲を鑄て、艦を造り、西洋の陣法を錬習す。鳳谷翁を擢あげ養賢堂教官と為す。旁かたがた鑄造のことを督す。翁は太田長五郎を薦め、大砲を鑄ることを藩侯に告ぐ。三浦乾也を聘えて、江戸に於いて軍艦を造り開成丸と号す（注）。蓋し本邦洋形軍艦を造るの権輿けんい（物事の始め）と云う。

人と為り慷慨大節（すぐれた節操）あり、幼くして学を好み、郷里奇童と称す。長じて詩、天書（仙人の言葉を記した書物）を善くす。殊に防海・経世・開産・興業に意を注ぐ。

海内を周遊し、山海の阨塞あいそく（地勢がけわしく要害の地）嶮●1を詳らかにす。英俊と多く交わり、国事を談ず。

郷に帰り帷とぼりを下ろして（俗事を離れて読書生活をする）石巻港に生徒を教える事年有り。後、藩命を奉じ蝦夷を歴遊す。其の著する所数十種。曰く、海防策東藩野乗。茂庭伝記。西遊記。西遊目録。西遊余話。西遊吟稿。砒山小詩。北遊日箋。蝦夷附録。仙藩考義録。仙台復讐伝。松島竹枝百首。石巻雑詠。石巻全図。蝦夷海陸路程図。松島全

図。陸奥全図。耶馬溪図巻。蝦夷島奇観。千貫浦御船記紀。阿美津斃●2 蛇事なり。

嗚呼、翁の如きを山海清淑の氣稟る（上の者が下の者へあたえる）と謂う可し。継林（あとを継ぐ）大槻諸賢、而して興る者なる矣。

頃 翁の子常治来りて曰く、郷人諉れずして先考（亡父）の碑を將に木間塚村竹谷小覺の側に建てんとす。以て先生の曾誠（以前にあったしるし）朽ちざらんことを図る。

先考諸銘の因叙（のべるよりどころ）は、その梗概（あらすじ）に曰く。翁、諱は篤謙、字は君鳴、謙吾と称す。小野寺氏鳳谷は其の号なり。父は喜佐衛門と称し、喜樂と号す。母は佐藤氏。仙台藩主伊達氏族松山邑主茂庭氏の世臣なり。其の祖は竹谷を墾開し子孫世居す。翁に至り宗藩士に擢げんが為、千葉氏の子篤之を養い旧里の家を嗣ぐ。

翁、慶応二年四月十三日病没す。年五十七。仙台定禅寺に葬る。配後藤氏一男一女を生む。即ち常治後を承け、女は青木平左衛門に歸ぐ。

銘曰

書無益人	奚足為文	（書は人を益すること無くして	なんぞ文をなすに足るや）
事無益国	奚足為勲	（事は国を益することなくして	なんぞ勲となすに足るや）
巨砲大鑑	拡張三軍	（巨砲の大鑑	三軍を拡張す）
治可守国	戦可破堅	（治は国を守るべし	戦いは堅を破るべし）
關幽頭晦	著書等身	（關幽と頭晦	著書は等身）
書所不盡	画以写真	（書くところは尽きず	画は真を写す）
松島之海	金華之山	（松島の海	金華の山）
翁之名績	永世俱伝	（翁の名績	永世に俱に伝えん）

明治二十七年九月

女子高等師範学校教授正六位南摩綱紀撰

仙台

大越英春 書

（注）

- 1 解説板の「謙治」は通称。元服後は「謙吾」。
- 2 前頁の鹿島台町史のアンダーライン部分については、造艦の地が松島湾の浦戸諸島の寒風沢島であることから、「江戸から三浦乾也をまねき、軍艦を造って開成丸と名付けた」と解すべきである。
- 3 鹿島台町史の●1：广の中にコを上、火を下に置いたもの。●2：虫へんに芥。



▲小野寺謙吾鳳谷先生の墓（臨濟宗 慈明寺：宮城県大崎市鹿島台木間塚字竹谷坂 28）